

二、「伊豆のお山」の歌垣

歌垣が古代から最近に至るまで、きわめて普遍的に見られる民俗行事であったこと、そしてそれが恋の歌を生み出す重要な場であったことについては、拙著「古代歌謡と儀礼の研究」に詳しく述べたが、ここに報告したいと思うのは、その中に引用した「伊豆のお山」の歌の背景についてである。

こんどござらは持て来てたもれ
伊豆のお山のなきの葉を

この歌は早く寛永以後延宝四年までの流行歌を集めた『淋敷座之慰』の中の「なげぶし品々」の一つとして見え、高野斑山博士の『俚謡集拾遺』には東京府の木遣歌として採集されている。最近社会思想社の現代教養文庫の一冊として出された服部龍太郎氏の『定本日本民謡集』の岩手県の南部半

方節

こんど来る時や持て来ておくれ

奥の深山のなきの葉を

は、たぶん右の替歌であろう。私はこの民謡を春山入り（伊豆のお山への御岳参り）の若者に対する求愛の歌と解釈したのであ

○

あったのである。

たが、それは恋の行事である歌垣が春山入りに源流するものであること、その時花や青葉を採んで家に持ち帰ったり、恋人に贈ったりすること、春山入りの習俗は、その地方の名山の神社に参拝する形の御岳参りにも受継がれ、さらには修験道の峯入りにまでも受継がれていることなどに基づいてであった。

しかしそれらの例はいずれも伊豆のお山以外の例である。このお山にも他の例と同様のお岳参りが行われたらしいことは、神

奈川の盆踊歌「毎年踊子が御山へ登る云々」の歌詞から想像されるが、それだけでは不十分だ。伊豆のお山は現在も伊豆山神社として熱海市にあるわけであるが、神社の伝承や文書に、それを裏つけてくれるようなものが何かありはしないだろうか、というのが私のひそかな期待であり、願っていたのである。

幸い今年の正月は、家に居なければならぬ用もなかったため、伊豆山神社参拝をかねて伊豆で正月を迎えるべく、暮の三十一日家内同伴、新幹線に乗った。清水港で汽車を降り、三保の松原を見物して、こんどはタクシーで旧東海道を通って薩埵峠の下に出、そこから田子の浦を由比まで走ってもらった。これは亦人の「田子の浦ゆ打出て見れば」の解釈についてかねて考えていたことを、实地に確かめるのが目的であったが、結果はほぼ予想どおりであった。

大晦夜は由比に泊り、元日は伊豆長岡、二日はいよいよ伊豆山神社である。高い石段を登って行くと、境内はひっそりと静まり返り、一組の若い男女が茅の輪をくぐっていただけである。見廻わすと一隅に立札があり、「盞符たんぷ椰の葉守」の由来が書いており、参拜の後社務所に行くと、お守りの包み紙にもそれが印刷してあった。嬉しいことには、そこに前に掲げた民謡が引かれており、さらに『本朝俗諺志』の

伊豆権現の神木なきの木、凡そ三回り、高さ十丈ばかり、葉厚く豎に筋あり、此の葉を所持すれば災難を通ると守袋に納む。又女人鏡に敷けば則ち夫婦の仲むつまじきなり。此の木他国に稀なり

という記事も紹介されている。

この神社が源頼朝以来、鎌倉幕府の崇拜を受けたこと、『金槐集』や『続後撰集』によれば源実朝もここに参拝して歌を詠ん

でいることはよく知られているが、私にはこのお山の民俗的側面の方が面白い。

伊豆のお山のナギの葉に関する民俗は、

徳川時代の初めから江戸にはよく知られていたらしく、夫婦和合の呪いとして女人が鏡に敷く習俗は、『歴世女装考』（弘化四年）や石上宣統の『卯花園漫録』（文化六年刊）、『用捨箱』などにも見えるよし、角川書店の『図説俳諧大歳時記』にも紹介されている。いったいナギの葉に、どうして夫婦和合の功德があると考えられるようになったのか。

ナギの木は暖い地方に自生するイヌマキ科の常緑樹であるが、紀州の熊野神社やその系統の神社にこれを神木とするものが多く、京都では西院の春日神社域内の還木神社、壬生の椰神社、東山の今熊野神社などはその例であり、上京区の熊野神社では神の代わりにナギを用い、神饌の下にもナギの葉を敷く習わしになっている（井上頼寿

『京都民俗志』）。

したの葉を椰にもちろの鏡かな 宗房
(俳諧毛吹草)

によれば、江戸初期正月の鏡餅のお飾りにナギを用いる所もあったのである。

このようにナギの葉が神木や呪物として尊ばれたのは、ナギを悪魔を「薙ぎ払う」意に解したり、「凧」の意に解したりしたことから来たもので、開運除災、海上安全、さらには交通安全の護符に用いられたのである。しかし夫婦和合の功德は、ナギの語音からは出て来そうもない。心が「和々」意に解してのこととも見られなくはないが、それなら何も男女・夫婦に限ったことではないはずである。私はやはりお岳参りの「伊豆のお山」の民俗行事から来ていると思う。

紀州の熊野神社はわが国でもっとも古い神社の一つであるが、平安朝になると観音信仰、弥陀信仰と結びついて、天皇や貴族

の参拝する者多く、中世以降は吉野の金峯山と共に修験道の本山として栄えたが、

ちはやぶる熊野の宮のなきの葉を交らぬ千代のためしにぞ折る

定家

(拾遺愚草)

御熊野に頼みをかくる諸人の、かざし

にさしたる榊の葉を

(平治物語)

などの例を見ると、一般の御岳参りと同様に、青葉の枝をタマフリの呪物として折り取ったり、かざしに挿したりしたことが分かる。ただここでは一般の青葉の枝でなく、語言上の呪術性によって榊の葉が用いられているのが特長である。

伊豆権現も社伝によると役の行者の伝承があつて、修験道と関係のあることが知られると同時に、ナギの葉の信仰があることから見ても、熊野信仰と無関係であるとは考えがたい。ただし熊野の場合は歌垣的な行事のあつた形迹が認められないのに対して、伊豆山の方はそれがあつたのである。

そして熊野その他の上方のナギの葉の呪的効力が開運除災、海上安全の範囲に止まっているのに対して、伊豆山の方はそのほかに、夫婦和合の功德があるという相違は、両者の行事の相違に基づくものと考えられるのである。伊豆山神社の護符の由来書に曰わく、

往時はなぎ祭、一名恋まつりとも言われた神事が、全国から夢多き男女の参集を得て、極めて盛大に執行されたこと

とが神社の記録にのこっています

と。私はまたその記録を拜見する機会を得ていないが、「なぎ祭」「恋まつり」と呼ばれる神事は、常陸風土記に見える筑波山の歌垣の如きものではなかったかと思う。全国から集まつた男女によって盛大に行われた「恋まつり」といえば、歌垣的な神事以外には考えようがないではないか。そしてその行事を「なぎ祭」ともいうのは、歌垣で榊の葉が重要な役割を負っていたからに

相違なく、それはこの植物の葉または枝が、かざしとして挿されると共に、男女の媒介をしたからであろう。さればこそ江戸の乙女たちは伊豆山参りの若者たちに向かつて「こんどござらば持て来てたもれ」とナギの葉の贈物を期待したのであろうし、また神社の側からはこれを夫婦和合の靈符として、諸人に授けるようにもなったのであろうと思う。

春山入りの青葉の枝、薪、杖はその地方の信仰の対象となつた名山では、山人がそれをタマフリの呪物として人々に授けるようになったことについては、さきの書物にも書いたが、伊豆のお山の榊の葉も、元來は民衆が折り取つて呪物や贈物としたのを、後には神人がこれを「お守り」という形で授けるようになったのであろう。延宝頃に歌われた「こんどござらば持て来てたもれ」は、榊の葉を折り取つて来てくれる意味であつたと思われるが、『本朝俗諺志』

が書かれた頃には、もうお守りが出されていたのである。このように考えると、このお守りの功德は、夫婦和合よりも、縁結びの方が、より適切だということになる。

○

さて伊豆のお山で歌垣が行われたとすると、注意されるのは社の北の上手にある「子恋の森」で、ここにはナギの木が多いらしい。「恋まつり」の行事では、社頭の神事に続いて、この子恋の社で性的解放が行われたのではないか。

子恋の森のことは枕草子にも「森は、大荒木の森、しのびの森、ここひの森」と見え、拾遺集にも

ここにだにつれづれと鳴く時鳥まして
子恋の森はいかにぞ

という歌が見えるから、都にも知られた東国の歌枕となつていたものであろう。ココトは「かかひの訛」だとする『大日本地名辞書』の説は、必ずしも信用のかぎりではないが、歌垣ないしカガトの行われた森で

あったことは、ほぼ疑いない。右の地名辞書に引く「伊豆志稿」によると、子恋の森には雷電社があり、その上宮の相殿には男女二神を祭って、古来の祭式に二神伉儷、王子降誕の例があるという。とすれば伊豆山神社、つまり走湯権現とは別に、この山の神を祭る神社があって、それが歌垣の行事の方から豊穰の神、和合の神としての性格を強めて行ったのではないかと考えられる。今後機会を得て、さらにその辺のところを調べてみたいものである。

(一九六六、一二、一〇)